

マリー・ド・フランスの『レ』における amer という語に関する一考察

川口 陽子

マリー・ド・フランスの『レ』における「愛」を巡る考察の一段階として、我々は以前、*amour* という語の使用例を分析し、『レ』において *amour* は、1) 男女の愛（夫婦愛、愛の神を表す場合を含む）、2) 神への愛（但し、誓いの言葉における使用に限られる）、3) 同性者同士の愛（同性愛的な意味合いは全く見られない）という結論に達した⁽¹⁾。では、*amour* と関連の深い *amer* という語の場合はどうなっているのだろうか——これが本稿の出発点である。

マリー・ド・フランスの『レ』における *amer* に関しては既に、D・マクレランド(1977)⁽²⁾と、大高順雄(1994)⁽³⁾がある。だが、マクレランド(1977)は個別の情報を記しておらず、*amer* の意味範囲に関する考察も詳細ではない。大高(1994)はかなり個別の情報を提供しているとはいえ、全例を説明しているわけではない⁽⁴⁾。

したがって我々はまず、*amour* に関する分析の場合同様、J・リシュネル版⁽⁵⁾をテキストとし、それにおける *amer* の 137 使用例に動詞省略箇所 5 例と派生語 *s'entreamer* の 6 使用例を加えた全使用例 148 を、行為の主体と対象の関係別に分類し、使用箇所一覧を作成した（本稿末に掲載）。なお、*amer* の主語、直接目的補語が文中で省略されている場合でも、文脈から判断可能であれば、それにしたがって分類した。そして、本稿では、まず辞書や先行研究における語彙定義を概観し、次いで、今回の我々の分析結果をもとに、『レ』において *amer* が表す感情や人間関係に関する考察と、*amer* の意味範囲の再検討を行いたい。

1. *amer* について —— 辞書及び『レ』に関する先行研究における定義

A.-J. グレマスは『古フランス語辞典』の中で *amer* を「1)情熱的な感情を感じる(*aimer, éprouver un sentiment passionné*)、2)大切に思う(*aimer, chérir*)、3) *amer mieus* より好む(*préférer*)」と定義している⁽⁶⁾。

マクレランド(1977)によれば、リシュネル版『レ』における *amer* の 135 例は、1) 欲望(*désir*)に対する単なる性向(*tendance*)を表す (2 例)、2)愛(*amour*)を表す (108 例)、3)愛情(*affection*)や好感(*sympathie*)を表す (25 例) に分類される⁽⁷⁾。

また、大高(1994)は、マリー・ド・フランスの『レ』、『寓話』、『聖パトリックの煉獄』における *amer* を、「A) [官能的な意味(*sens érotique*)での] 愛情を感じる、B) [官能的な意味でない] 愛情を感じる、C)好む(*éprouver du goût pour*) (目的語として有生名詞、無生名詞ともに取る)、D)礼拝する(*rendre un culte à*)、E) [有生名詞の付加] 形容詞として使用された過去分詞」に分類している⁽⁸⁾。

以上から、『レ』において *amer* によって表される感情の対象は、異性者だけに限定されていないことが理解される。

2. 男女の愛 (官能的愛)

2-1. 恋人達

恋人達の愛を表現する *amer* は、Bを除く 11 作品全てにおいて見られる⁽⁹⁾。

amer は形式上、主体から対象へという一方的な感情しか表さないが、派生語 *s'entreamer* や、繰り返しにおける動詞省略を用いた対句表現(*M* vv.492-3, *EI* vv.573-4, v.588 と v.590)によって、相互的な愛を表現することは可能である。また、否定形が 2 例のみ⁽¹⁰⁾と非常に少ない。しかも、これら 2 例のうち、*EI* v.349 はギリアドンがエリデユックの胸中をまだ知らぬまま立てた仮定を表す箇所であるし、*EI* vv.468-469 では二重否定のためにかえって *amer* が強調されている。このように『レ』では、恋人達の愛を表すために *amer* が徹底して肯定形で使用されており、否定形も特殊な文脈でしか見られないために、恋人達の愛は揺るぎないものという印象が残るだろう。

また、恋人達の関係は常に 1 対 1 対応である。唯一 *Ch* では、奥方と 4 騎士の関係が見かけ上は 1 対多の対応関係である。しかし、奥方の愛する対象は v.52 を除く全例で 4 騎士であり、v.52 にしても 4 人の中の誰を最も愛するべきか分からない彼女の姿を描写するものである。また、v.155 で奥方は、4 騎士から愛されなかったと告白している。したがって、奥方にとっては 4 人揃って初めて愛する対象となるのであり、3 人の死後、生き残った 1 人だけを愛することは彼女には不可能なのである。それは、負傷した騎士に対する奥方の感情が *amer* によって表現されることがないこと、さらには、命を落とした騎士達に対する感情として使用された *amur* (v.167) が今は亡き者達へのいとおしさや憐憫の情を表している⁽⁴⁾ことから確認される。このように、この作品でも恋人関係は、他の作品同様、1 対 1 の対応関係になっているのである。

2-2. 夫婦

夫婦における場合にも、恋人達の場合同様、相互的な愛を表す *amer* の使用例がある。*El* v.12 では *s'entreamer* の使用によって、また、*B* v.23 では動詞省略による対句表現によって、相思相愛の夫婦の姿が描かれる。

しかし、*Y* では老領主から妻への愛を述べる使用例(v.24)があるだけで、そのために夫の妻への片恋慕という印象が残る。その原因は何だったのだろうか。

Y の老領主は妻を愛していたとはいえ、彼女を 7 年以上も塔の中の一室に幽閉し、厳しく監視させ、ほとんど誰とも話さえさせなかった(vv.25-40)。彼の頭を占めていたのは、奥方の言うように、彼女に「裏切られるのではないか」(v.74)という恐怖である。夫から信頼されない妻は、夫を愛さないどころか、かえって彼や彼と結婚させた両親、他の者達を呪い、恋人を見つけないと神に求めるようにさえなる(vv.67-104)。同様に、配偶者に対する不信が夫婦の不幸の起源となっている例は、*B* の妻においても見られる。夫は秘密を明かせば破滅することを承知の上で、全てを妻に打ち明ける(vv.53-56, vv.63-66, v.70, vv.72-78, vv.89-96)。彼にそうさせたのは「私はあなたを誰よりも愛しています(*eim*)。／私には何もお隠しになら

ないで。／私を少しもお疑いにならないで。／そうでなければ、愛(*amistie*)⁽¹²⁾がないように思われましょう」(vv.80-83)という妻の言葉であり、この時の夫の態度は妻への信頼、すなわち愛の証である。にもかかわらず、夫を信じられなくなった妻は夫を裏切る決心をし、同時に夫婦愛は終焉を告げる。そして、配偶者を信じられなかったYの老領主とBの妻は、ともに物語の結末で罰せられることになる。

一方、E1においてはv.12の *s'entreamer* を修飾する副詞 *léaument* (誠実に) が夫婦間の信頼を表現している。さらに言えば、エリデュックはギリアドンを愛するようになった後でさえも、妻に対して誠実であろうと努め、妻を気遣っていた(vv.83-84, vv. 323-326, vv.462-465, v. 475, vv.597-598)。だからこそ、彼はギリアドンへの愛ゆえの苦しみ以上の罰を受けることもなく、彼と彼の二人の妻達を称えるべく、このレが作られたのではないだろうか。

『レ』では婚外の愛が賛美されており、政治的経済的理由によることの多い当時の結婚には愛も信頼のかけらもないイメージがあったという指摘がある⁽¹³⁾。しかし、以上の考察から、『レ』の語り手は、結婚という枠内においても愛は存在し、夫婦愛の礎として信頼が不可欠であると考えていたことが理解される。

2-2. 愛する男—敵対者—愛する女

『レ』では恋人達と敵対者を巡る三角関係が描かれることがある。その場合、行為の主体が敵対者であれば *amer* は全て肯定形であるが、それに対し、対象が敵対者であれば、否定形となったり(B v.107)、文脈上否定されたりする(Lv v.270)。さらに、B v.104 と v.107、Lv v.264 と v.270 は各々対になっており、これらから、敵対者の愛の告白は答えが得られない(B)、または拒絶される(Lv)という構図が浮上する。しかもこの構図は、三角関係が描かれる他の作品も含めて、物語中で変形することがない。ただ B においてのみ、「私はビスクラヴレになるのだ」(v.63)という夫の告白を境に、愛し合う夫婦と敵対者という構図から、愛し合う恋人達と敵対者としての夫という構図へと、三角関係図の変形が起こる。

行為の対象が敵対者以外の特定可能な異性者である例にも、同じ構図が当ては

まる。その唯一の例 *Lv* v.526 「彼女たちを愛していない(*nes amot*)」は、アーサー王の宮廷に妖精からの第二の使者として到着した乙女達に関するイヴェンの質問に対するランヴェアルの返答の一部である。そこには、ランヴェアルの命を救うためとはいえ、「あれこそまさにあなたの恋人だ」(v.523)と断言し、彼に乙女達を恋人として押し付けようとするイヴェンやその他の騎士達と、彼らの申し出を拒否するランヴェアルがいる。その結果、彼らの間に、恋人達と敵対者の関係に類似する構造が感じ取られることになる。

2-3. 行為の主体、対象のどちらか一方が、性別指定のある不特定者である場合

行為の主体、対象のどちらか一方が不特定者であるとはいえ、どの例も、単に異性一般(へ)の愛について述べているわけではない。

G v.561, v.575, v.723 では行為の対象が不特定者であるが、詳細な条件を付されており、結局それを満たせるのは条件を提示した人物の恋人だけである。*F* v.129, v.130, *El* v.465 では恋人または妻以外は愛さないという表現で彼女への愛が強調され、*Chi* v.17 「奥方は皆を愛することなど出来なかった」は彼女の4騎士への愛を際立たせるための伏線となっている。このように、どの例においても1対不特定の対応関係は、比較対象として、特定の1対1の対応関係を浮かび上がらせるものなのである。

また、どんな女性(男性)でも、愛さずにはいられない(*G* v.61, *Chi* v.16)、愛されたいと望む(*Chi* v.30, *El* v.363)という言及は、特定の男性(女性)を対象とする異性一般の感情を表すものであり、ここでは不特定対1の対応関係を指摘出来る。但しこれらは、件の人物の異性に対する絶大なる魅力を強調するための描写にすぎない。

G v.445 「あなた様は恋をしておられます!(*vus amez!*)」、vv.447-448 「あなた様は愛することがお出来になります(*Amer poëz*)、／あなた様の愛が叶うように」、v.449 「私の奥方様を愛したいと思われるお方なら(*Ki ma dame vodreit amer*)」は、奥方の侍女のギジュマールに対する言葉の一部である。この時既に、話し手である侍

女は、奥方とギジュマールが互いに思い合っていることに気付いており、その上で、聞き手のギジュマールに反感や不信感を抱かせぬよう配慮して、意図的に 1 対不特定の対応関係を選択し、話を進めていると考えられる。

B v.51 「あなたには好きな方がいらっしやるよう(Mun escient que *vus amez*)」は、週のうち丸三日も夫が誰も知らぬ場所に消えてしまうことに対する不安(*vv.24-28*)ゆえに発してしまった妻の言葉である。そこには、妻の見知らぬ女性に対する嫉妬が感じられる。ところで、アンドレアス・カベルラヌス著『宮廷風恋愛の技術』中の「恋愛の戒律」では、愛には嫉妬心が必要であり、恋する者は常に不安に駆られるものであり、嫉妬が愛を募らせると述べられている⁽⁴⁾。この指摘を鑑みると、*B* の妻の嫉妬心は、夫婦愛が恋人達の愛と変わらぬものであることを再度確認させるものであると言えるだろう。

2.4. 行為の主体、対象がともに不特定者である場合

行為の主体、対象ともに性別指定がなされている例においては、行為の主体や対象が明記されていれば、必ず性別以外の条件も付されている。だが、付された条件によって、人物が特定化される例(*Eq* v.148, *El* v.371)と、条件付きの一般論を述べている例(*G* v.494, v.523, *Eq* v.80, v.82, v.83, v.157, v.162, *Ch* v.197, *Chv* v.22)に二分される。さらに言えば、後者の中でも、*Eq* v.80, v.82, v.83 では、文脈から行為の主体は「かくも美しい女性=家令の妻」という読みが可能であり、また、*Ch* v.197 では、奥方のような女性と 4 騎士のような 4 人組との関係が条件であることで彼らの愛の卓越性が際立つことになる。なお *Ch* v.20 は、他の例ほどに恋愛論が展開されているわけではなく、その点において例外的である。

行為の主体、対象ともに性別指定のない場合は、全例において直接目的補語がない。行為の主体に関しては、*G* v.120, v.120, v.121 では形式上、男性複数(*tuit cil*)であるが、女性を含むことも可能であり、「全ての人々」を意味すると考えられ、これらの箇所では *amer* が表す感情の一般論が示されていると言えるだろう。また、*Eq* v.19 の不定詞 *amer* は、*amur* の同義語と見なされる。唯一 *Eq* v.143 「もし誰か

がより身分の高いところで恋をするとすれば(S'aukuns aime plus hautement)」では、「より身分の高いところで」という条件付けによって行為の主体と対象間の身分差が想定され、それが奥方とエキタンを想起させる。

3. 官能的愛以外の愛（対象が人間である場合）

3-1. 家族を除く、同性同士の愛

まず、行為の主体、対象ともに特定の個人である場合を取り上げる。

男性同士の愛に関して G・S・バージェス(1987)は、「12 世紀では、動詞 *amer* や実詞 *amur* は君主と臣下の間の関係を示すために用いられている」⁽⁴⁹⁾と指摘しているが、その関係は *El v.31, v.120, v.266, B v.184* において確認される。一方、*M v.444, El v.1002* では主体と対象間の身分差は不明であるが、年齢差はあるように見える。いずれにせよ、主体と対象の設定に対して、身分や年齢の上下関係の影響はないようである。但し、身分の上位者が主体となる場合には、*amer* は *cherir*（可愛がる）(*El v.31, v.266*)や *avoir chiers*（好意を持つ）(*El v.120*)と等位におかれている。

女性同士の場合も、男性同士の場合同様、年齢、身分の差が行為の主体と対象の間に見られる。但し、女性同士の例では、年齢、身分の上位者が主体、下位者が対象と定まっている。*F v.102* では *amer* が *cherir* と等位におかれている。また、*F v.384* の *amer* は *preisier*（高く評価する）と等位におかれているが、これは、侍女としてのフレーヌの献身的な態度に対して奥方の抱いた感情を表す言葉であり、そこにはフレーヌに対する彼女の「好意」が感じられる。

次に、主体、対象の一方が不特定者である 2 例についてであるが、ともに男性同士の場合である。また、これらの箇所での主体と対象の関係に関しては、*B v.20* においては両者が隣人同士であるということ、*M v.325* では両者ともに騎士であるということ以外、不明である。但し、*B v.20* においては、その行為の主体は「彼の隣人達皆(*tuz ses veisins*)」と男性複数であるとはいえ、その中に女性の隣人達を含むことも可能であり、換言すれば、「全ての隣人」と見なされ得るのである。

3-2. 親子、近親者の愛

A-J. グレマスの『古フランス語辞典』における *amur* の定義の中では第1義として挙げられていたにもかかわらず、『レ』の中では *amur* が親子の愛を表すことがなかったが⁽¹⁶⁾、*amer* の場合はそのための使用例が確認される。しかも、親が子を愛する場合(*G* v.39, *DA* v.24, v.88, *M* v.466)にも、子が親を愛する場合(*DA* v.99)にも、*amer* は用いられている。さらには、叔父から甥への愛を表す例もある(*EI* v.751)。

また *G* では、母は息子を愛し、父も彼を可愛がった(« A merveille l'*amot* sa mere / Et mult esteit *bien* de sun pere. », vv.39-40)と語られているが、ジョンンは v.39 を *cherir*、v.40 を *aimer* を用いて訳出している⁽¹⁷⁾。その他に *amer* は、*DA* v.24 (父から娘への愛) では *cherir* と、*DA* v.99 (娘から父への愛) では *avoir chier* と、*M* v.466 (父から息子への愛) では *tenir chier* (いとおしむ) と等位におかれている。ここには、親にせよ子にせよ性別による相違も、親の愛か子の愛かでの相違も見られない。

3-3. 行為の主体が、異性の不特定者である場合

行為の主体が、異性の不特定者である場合に該当する 2 例とも、その行為の対象はフレーヌである。

F v.311 の *amer* に関して、大高(1994)は、それを官能的愛に分類している⁽¹⁸⁾。確かに、主語「身分の低い者であれ、高い者であれ、誰一人として(*un sul, petit ne grant*)」(v.310)は男性形である。しかし、例えば、「身分の低い者であれ、高い者であれ、／老人であれ、子供であれ(*petit ne grant / Ne veillard ne li enfant*)」(*Lv* vv.575-576)は、女性も含めた「全ての人々」と換言可能な表現である。したがって、*F* v.311 の行為の主体も、ゴロンの館にいる全ての人々であり、彼らのフレーヌへの愛には官能的な性質はないと考えられる。そのことは、ここでは *amer* が *cherir* や *honorer* (称える) と等位におかれていることから確認出来る。

同じことが、*F* v.309 の場合にも当てはまる。確かに、ここでの主体「彼 (=ゴロン) の全ての家臣と召使い(*E tuit si humme e si servant*)」は男性複数である。だがむしろ、彼らは、*F* v.311 の行為の主体同様、館にいる人々の代表者であり、彼ら

のフレーヌへの愛は彼女への親愛、敬愛であり、ゴロンの彼女への官能的愛(*F* v.308)とは区別すべきであろう。

このように、これらの例は形式上、主体と対象は異性であるが、その実質は、男女ともに含む多(あるいは全)対1という対応関係になっているのである。

3.4. 行為の主体が、性別不明の不特定者である場合

全ての例で、行為の主体は不特定多数、対象は特定の個人である。しかも、対象(＝ランヴァル)を愛することが条件となっている *Lv* v.585 を除けば、行為の主体は「皆(*tuz*)」(*G* v.44, *Lv* v.228)であったり、省略されていたり(*Eq* v.14, *Y* v.517, *M* v.19)、また、「愛さない人はいない」と二重否定になっている(*F* v.241)。その結果、これらの箇所では、主体は老若男女全てを含み、全対1対応関係が描かれていると言えるだろう。

4. 人間以外を対象とする愛

まず、「神への愛」を表す *amer* を指摘出来る。しかも *amur* の場合とは違って⁽¹⁹⁾、単なる誓いの言葉にすぎない例ではない。*EI* の結末において主人公達は皆、修道会に入り、「誠実に神を愛す」(v.1178)べく、大いに努めたと語られている。したがって、この点において、*amer* は *amur* よりも意味範囲が広いと考えられる。

また、*M* では白鳥への愛が述べられている(v.162)。このように人間以外の生物を対象とする愛を表すことも、*amur* には見られない、*amer* にのみ確認される用法である。なお、白鳥に関しては、「白鳥は、一夫一婦制であり、新しい連れ合いを取るのは、夫婦のどちらか一方が死んだ時に限られており、忠実さのこの上ない象徴として役立つ」⁽²⁰⁾というバージェス(1987)の指摘があり、この白鳥というモチーフを通して、夫婦の信頼、愛の重要性が暗示されているように思われる。

また、単なる嗜好を表す *amer* の例もある。これも *amur* には見られなかった用法である。だが、ここで行為の対象となっているのは、「楽しみ(*deduit*)」(*Eq* v.15, *Lv*

v.278)と「愛(*druerie*)」(*Eq* v.15)という抽象概念だけである。

5. 結び

以上のことから、『レ』における *amer* の意味範囲は以下のように定義される。

1) 男女の愛(官能的愛): *amur* の場合同様⁽²¹⁾、*amer* の使用例数が最も多い。恋人達、夫婦という1対1対応関係での愛を表す例や、これらの2者間に第3者が敵対者として割り込もうとする三角関係における愛を表す例が見られた。また、形式上は1対多、多対1対応関係の例もあったが、それらは、他の1対1対応関係を際立たせる例、その表現を発する人物の故意による例等、特殊な場合であった。「愛というもの」を表す *amer* も確認された。*amur* で表され、*amer* で表現されなかったのは、「愛の神」に関する場合だけである。

2) 行為の対象が人間であるが、官能的ではない愛: *amur* が同性愛的な意味合いを含まない同性間の愛を表すことしかなかった⁽²²⁾のに対し、*amer* の場合は、それに加えて、親子の愛、全対1対応関係での愛を表す例も確認された。それらの例において、身分、年齢、性別による際立った相違は見られなかった。また、これらの *amer* を翻訳するにあたって、ジョンが *amitié* を訳語として多用している(*G* v.44, *F* v.102, v.384, *B* v.184, *M* v.444, v.325, *EJ* v.120)ことも指摘しておく。

3) 行為の対象が人間以外である愛: *amur* の場合は、誓いの言葉としての「神への愛」を除けば、全く見られなかった使用法である。また、神に加えて、白鳥という生物や、楽しみ、愛といった抽象概念が対象とされていた。だが、現代フランス語の *aimer* に見られる、無生の具対物に対する用法は確認されなかった。

バージェス(1987)は、『レ』における愛には、男性と女性との愛、人間と人間との愛、人間と神との愛があると指摘しつつも、男女の愛は『レ』において非常に重要なテーマであり、そのために数多くの研究がなされてきたとも述べている⁽²³⁾。男女の愛、特に恋人達の愛に関する *amer* の使用例数が非常に多かったという事実は、このテーマの重要性を裏付けるものである。だが、バージェス(1987)も言うように、『レ』における愛はそれだけではないし、しかも、以上の考察から、*amer* の

意味範囲は、バー・ジェス(1987)の指摘にある以上に広いことが確認された。その中には、使用例数こそ恋人達の愛を表す場合よりも少ないとはいえ、軽視すべきではない人間関係を表す例もあるだろう。そのことを蔑ろにしたまま、『レ』における愛について語ることは出来まい。したがって、『レ』において描かれた人間模様の全体像を把握するためには、これら全ての *amer* の意味範囲を視野に収めておくことが必要なのである。

註

本論前半(2-2 まで)は「マリー・ド・フランスの『レ』における *amer* という語に関する一考察 1」(『TLLMF』, 第7号, 大阪市立大学大学院文学研究科 TLLMF 研究会, 1996, pp.17-24)に修正を加えたものである。転載を快諾頂いた『TLLMF』編集委員会の皆様に感謝の意を表したい。

- (1) Cf. 拙論, 「マリー・ド・フランスの『レ』における *amur* という語に関する一考察」, 『TLLMF』, 第6号, 大阪市立大学大学院文学研究科森本研究室, 1995, pp.13-21.
『レ』における「愛」については、引用文献以外に、次のものを参照した。
DAMON, S. Foster (1929), « Marie de France : Psychologist of Courtly Love » in *PMLA*, n°44, pp.968-996. / SPITZER, Leo (1930), « Marie de France - Dichterin von Problem-Märchen » in *Zeitschrift für romanische Philologie*, n°50, pp.29-67. / WATHELET-WILLEM, Jeanne (1969), « La conception de l'amour chez Marie de France » in *Bulletin bibliographique de la Société Internationale Arthurienne*, n°21, pp.144-145. / MIÉNARD, Philippe (1979), *Les Lais de Marie de France. Contes d'amour et d'aventure du Moyen Age*, coll.<Littératures modernes>, n°19, P.U.F. / CALUWÉ, Jacques de & WATHELET-WILLEM, Jeanne (1979), « La conception de l'amour dans les Lais de Marie de France : Quelques aspects du problème » in *Mélanges de langue et littérature françaises du Moyen Age offerts à Pierre Jonin*, <Sénéfiance>, n°7, CUERMA, pp.139-158. / FLORI, Jean (1992), « Amour et société aristocratique au XII^e siècle. L'exemple des lais de Marie de France » in *Le Moyen Age*, n°98, pp.17-34. / 月村辰雄(1988), 「マリー・ド・フランスの『レー』と恋愛の成立」 in 『十二の恋の物語 —— マリー・ド・フランスのレー ——』, 月村辰雄訳, 岩波文庫, p.287-324. / 花田文男(1989), 「マリー・ド・フランスの『レー』の新訳」 in 『千葉商大紀要』, 第26巻第4号, 千葉商科大学国府台学会, pp.35-46.
- (2) Cf. Denise McClelland, *Le Vocabulaire des Lais de Marie de France*, Editions de l'Université d'Ottawa, 1977, p.46, p.49, p.51 et p.159.
- (3) Cf. Yorio Otaka, *Lexique de Marie de France*, Maison d'Édition Kazama, 1994, p.27.
- (4) Cf. 註(3). 大高版『レ』(*Lais* in *Lexique de Marie de France*, *op.cit.*, p.749-800)において、*amer* の使用例は141(動詞省略5例を含む)があるが、『語彙辞典』で実際に取り上げられたのは、119例(動詞省略1例を含む)だけである。
- (5) *Les Lais de Marie de France*, publiés par Jean Rychner, coll.<C.F.M.A.>, n°93, Champion, 1983. 各作品名に関しては次の略号を使用する。『ギジュマール』: *G*/『エキタン』: *Eq*/『とねりこ』: *F*/『ビスクラヴレ』: *B*/『ランヴェル』: *Lv*/『恋する二人』: *D4*/『ヨネック』: *Y*/『夜鳴鶴』: *Ls*/『ミロン』: *A*/『不幸せな者』: *Ch*/『おいかずら』: *Chv*/『エリデュック』: *El*. 引用箇所に関しては作品名の略号と行数のみを記す。また、引用中の下線は全て引用者によるものである。なお、随時、大高版及び以下のテキストを参照した。これらに関しても、指摘箇所は作品名の略号と行数のみを記す。
Marie de France. Lais (1944), Edited by Alfred Ewert, Blackwell, reprinted 1987. / *Lais de Marie de France*,

- traduits, présentés et annotés par Laurence Harf-Lancner, texte édité par Karl Wamke, coll.<Lettres gothiques>, n°4523, Le Livre de Poche, Librairie Générale Française, 1990. / *Lais de Marie de France*, présentés, traduits et annotés par Alexandre Micha, coll.<GF-Flammarion>, n°759, Flammarion, 1994.
- (6) A.-J. Greimas, *Dictionnaire de l'ancien français jusqu'au milieu du XIV^e siècle* (1980), Larousse, 1988, p.27.
- (7) Cf. 註(2).
- (8) Cf. 註(3). 大高(1994)における amer に関する各項目の下位区分は以下の通り。「A.1.目的語=有生名詞・女性、A.2.目的語=代名詞・女性、A.3.絶対的用法(女性名詞の目的語が言外に示されている)、A.4.目的語=有生名詞・男性、A.5.代名詞・男性、A.6.目的語=数詞、A.7.絶対的用法(男性名詞の目的語が言外に示されている)、B.1.主語=男性、B.1.1.能動態、B.1.1.1.目的語=有生名詞、B.1.1.2.目的語=代名詞・男性、B.1.2.受動態、主語=有生名詞、B.1.3.成句『愛される(se faire aimer)』、B.2.主語=女性、目的語=代名詞、C.1.目的語=有生名詞、C.2.目的語=無生名詞」
- (9) B に関しては、ピスクラヴレの妻とその再婚相手となる騎士との愛を表す例があるとはいえ、それらは全て、二人が愛し合うようになる以前の場面、つまり騎士が愛し合う夫婦の敵対者にまだすぎない場面に限られている。そのため、本稿ではこれらの例を「行為の主体、対象のどちらか一方が、愛し合う男女の敵対者である場合」(使用箇所一覧 1-1-3)に分類した。
- (10) その他に、G v.436「彼女[=奥方の侍女]は、彼[=ギジユマール]が彼女[=奥方]を愛しているのかいないのか(u nun)を知らない」に、選択肢の一つとしての否定表現が見られる。
- (11) Cf. 拙論、前掲論文、p.14.
- (12) B v.83 «Ne semblerait pas m'aimer»を、P・ジョナンはリシュネル版の現代フランス語訳中で«Vous paraîtriez ne pas m'aimer»と訳している(*Les Lais de Marie de France*, traduit en français moderne par Pierre Jonin, coll.<Traductions des C.F.M.A.>, n°13, Champion, 1982, p.53).
- (13) Cf. 加藤恭子、「クレチアン・ド・トロワと同時代の作家たちにおける『愛』 in 『上智大学仏語・仏文学論集』、第 25 号、上智大学仏文科、1991、特に pp.21-22、pp.34-37。その一方で、中世の物語においては「夫婦の愛は望ましく、また望まれているもの」(Doris Desclais Berkvam, *Enfance et maternité dans la littérature française des XII^e et XIII^e siècles*, coll.<Essais>, n°8, Champion, 1981, p.23)という指摘もあることを挙げておく。
- (14) Cf. アンドレアス・カベルラス著、ジョン・ジェイ・バリ編、『宮廷風恋愛の技術』、野島秀勝訳、法政大学出版局、1990年、pp.236-238(特に第2、第20、第21、第22、第28条)。
- (15) Glyn S. Burgess, *The Lais of Marie de France. Text and Context*, Manchester University Press, p.151.
- (16) Cf. A.-J. Greimas, *op.cit.*, p.29. 拙論、前掲論文、p.18.
- (17) Cf. Pierre Jonin (trad.), *op.cit.*, p.4.
- (18) Cf. Yorio Otaka, *op.cit.*, p.27, A.a.2.
- (19) Cf. 拙論、前掲論文、p.18.
- (20) Glyn S. Burgess, *op.cit.*, p.152.
- (21) Cf. 拙論、前掲論文、p.14.
- (22) Cf. 拙論、前掲論文、p.18.
- (23) Cf. Glyn S. Burgess, *op.cit.*, p.134 and p.214, note 1 of ch. 7.

引用文献

- BERKVAM, Doris Desclais (1981): *Enfance et maternité dans la littérature française des XII^e et XIII^e siècles*, coll.<Essais>, n°8, Champion.
- BURGESS, Glyn S (1987): *The Lais of Marie de France. Text and Context*, Manchester University Press, ch. 7.
- GREIMAS, A.-J. (1988): *Dictionnaire de l'ancien français jusqu'au milieu du XIV^e siècle* (1980), Larousse.
- JONIN, Pierre (trad. en français moderne) (1982): *Les Lais de Marie de France*, coll.<Traductions des C.F.M.A.>, n°13, Champion.
- MCCLELLAND, Denise (1977): *Le Vocabulaire des Lais de Marie de France*, Editions de l'Université d'Ottawa.
- OTAKA, Dr. Yorio (1994): *Lexique de Marie de France*, Maison d'Édition Kazama.
- アンドレアス・カベルラス著、ジョン・ジェイ・バリ編、『宮廷風恋愛の技術』、野島秀勝訳、法政大学出版局、1990。
- 加藤恭子(1991):「クレチアン・ド・トロワと同時代の作家たちにおける『愛』 in 『上智大学仏語・仏

文学論集』第25号、上智大学仏文科、pp.19-37.

川口陽子(1995):『マリー・ド・フランスの『レ』における *amur* という語に関する一考察 in 『TLLMF』、第6号、大阪市立大学大学院文学研究科森本研究室、pp.13-21.

amer 使用箇所一覧

*本稿で考察対象とする148箇所中、動詞省略は *B* v.23 (行の後半) / *F* v.309 / *M* v.493 / *EI* v.574, v.590 の5箇所、*s'entremer* の使用は *Eq* v.183 / *DA* v.3, v.72 / *Ls* v.29, v.57 / *EI* v.12 の6箇所である。

*括弧無しの数値は使用例数を、[] 内の数値は使用例数の対全例比を表す。

**amer* の使用箇所は () 内に作品名の略号、行数の順で記す。

1. 男女の愛 (官能的愛) : 119 [約80%]

1-1. 行為の主体、対象ともに特定の個人である場合 : 87

1-1-1. 恋人達 : 74 [50%]

1) 主体=男性、対象=女性 : 39 (*G*: 425, 436, 496⁶⁾, 656 / *Eq*: 70, 71, 124, 197, / *F*: 248, 308, 483 / *Lv*: 132, 293 / *DA*: 63, 79 / *F*: 127, 397 / *Ls*: 23 / *Af*: 53, 156, 449, 489, 492 / *Chr*: 41, 152, 155, 217 / *Chv*: 14 / *EI*: 15, 343, 349, 368, 394, 420, 469, 573, 588, 684, 1127).

2) 主体=女性、対象=男性 : 30 (*G*: 433, 775 / *Eq*: 129, 314 / *F*: 289 / *Lv*: 116, 123, 615 / *DA*: 66 / *F*: 304 / *Ls*: 26 / *Af*: 26, 28, 493 / *Chr*: 52, 71, 142, 149, 201 / *Chv*: 93⁶⁾ / *EI*: 305, 339, 355, 440, 513, 536, 574, 590, 945, 1073).

3) 男女が互いに愛し合う : 5 (*Eq*: 183 / *DA*: 3, 72 / *Ls*: 29, 57).

1-1-2. 夫婦 : 5

1) 主体=夫、対象=妻 : 2 (*B*: 23[前半] / *F*: 24).

2) 主体=妻、対象=夫 : 2 (*B*: 23[後半], 80).

3) 夫婦が互いに愛し合う : 1 (*EI*: 12).

1-1-3. 行為の主体、対象のどちらか一方が、愛し合う男女の敵対者である場合 : 7

1) 主体=男性の敵対者 : 4 (*G*: 720, 760 / *B*: 104, 134)

2) 対象=男性の敵対者 : 1 (*B*: 107).

3) 主体=女性の敵対者 : 1 (*Lv*: 264).

4) 対象=女性の敵対者 : 1 (*Lv*: 270).

1-1-4. 行為の対象が、愛し合う男女の敵対者ではない、特定の異性である場合 : 1

1) 主体=ランヴァル、対象=妖精からの第2の使者である乙女達 : 1 (*Lv*: 526).

1-2. 行為の主体、対象のうち少なくともどちらか一方が不特定者である場合 : 31

1-2-1. 行為の主体、対象のどちらか一方が、性別指定のある不特定者である場合 : 15

1) 主体=女性 (達)、対象=男性の中心人物 : 1 (*G*: 61)

2) 主体=男性 (達)、対象=女性の中心人物 : 2 (*G*: 449 / *Chr*: 16)

3) 主体=男性の中心人物、対象=女性 (達) : 7 (*G*: 445, 447, 561 / *B*: 51 / *F*: 129, 130 / *EI*: 465⁶⁾)

4) 主体=女性の中心人物、対象=男性 (達) : 5 (*G*: 575, 723 / *Chr*: 17, 30 / *EI*: 363)

1-2-2. 行為の主体、対象ともに、性別指定のある不特定者である場合 : 12

1) 主体=男性、対象=女性 : 5 (*Eq*: 148, 162 / *Chr*: 20⁶⁾ / *Chv*: 22 / *EI*: 371)

2) 主体=女性、対象=男性 : 7 (*G*: 494, 523 / *Eq*: 80, 82, 83, 157 / *Chr*: 197)

1-2-3. 行為の主体、対象ともに性別不明の不特定者である場合 : 5 (*G*: 120, 120, 121 / *Eq*: 19, 143⁶⁾)

2. 官能的愛以外の愛 (対象が人間である場合) : 25 [17%]

2-1. 行為の主体、対象ともに特定の個人である場合 : 14

2-1-1. 行為の主体、対象ともに男性である場合 (家族を除く) : 6

1) 主体=王、対象=家臣、使者 : 3 (*EI*: 31, 120, 266)

2) 主体=家臣、対象=王 : 1 (*B*: 184)

3) 主体=ミロン、対象=若者 (息子であると判明する以前) : 1 (*Af*: 444)

4) 主体=ユリデュック、対象=隠者 : 1 (*EI*: 1002)

2-1-2. 行為の主体、対象ともに女性である場合 (家族を除く) : 2

1) 主体=奥方、対象=侍女 : 1 (*F*: 102)

2) 主体=奥方、対象=侍女としてのフレーヌ : 1 (*F*: 384)

2-1-3 親子、近親者：6

- 1) 主体＝母親、対象＝子：1 (G: 39)
- 2) 主体＝父親、対象＝子：3 (D: 24⁰, 88 / Af: 466)
- 3) 主体＝子、対象＝父親：1 (D: 99)
- 4) 主体＝エリデュック、対象＝甥達：1 (El: 751)

2-2 行為の主体、対象のどちらか一方が、不特定者である場合：11

2-2-1 行為の主体と対象が同性である場合：2

- 1) 主体＝隣人達（男性複数）、対象＝ビスクラヴレ：1 (B: 20)
- 2) 主体＝若者、対象＝貧しい騎士達：1 (Af: 325)

2-2-2 行為の主体と対象が異性である場合：2

- 1) 主体＝老若（男性複数）、対象＝フレーヌ：1 (F: 311)
- 2) 主体＝ゴロンの家臣、召使い、対象＝フレーヌ：1 (F: 309)

2-2-3 行為の主体が性別不明の不特定者である場合：7

- 1) 対象＝特定の男性：6 (G: 44 / Eq: 14 / Lv: 228, 585 / Y: 517 / Af: 19)
- 2) 対象＝特定の女性：1 (F: 241)

3. 人間以外のものを対象とする愛：4 [約 3%]

3-1. 主体＝エリデュック、ギルデリュエック、ギリアドン、対象＝神：1 (El: 1178)

3-2. 主体＝ミロン、対象＝白鳥：1 (Af: 162)

3-3. 主体＝エキタン、ランヴァル、対象＝抽象概念：2 (Eq: 15 / Lv: 278)

(a) 大高版では動詞が«aime»(<amer)ではなく«eruoit»(<sennuier)となっている。また、「amer」の活用形に関しては、リシュネル版、ヴァルンケ版、ミーシャ版では直説法現在、エヴァート版では直説法半過去である。/ (b) *Cliv* vv.92-93 に関しては次のように 2 通りの解釈がある。一つは、リシュネル版、ミーシャ版、ヴァルンケ版のように、「amot」の主語は省略された「彼女（＝マルク王妃）」、直接目的補語は関係代名詞の«que»（先行詞は«celui»、ここではトリストランのこと）とする解釈である。もう一つは、大高版とエヴァート版に見られる、「amot」の主語は関係代名詞«que»（先行詞は«celui»）、直接目的補語は«d'»（＝マルク王妃）とする、先に挙げた解釈とは主語と直接目的補語が逆の場合である。Cf. Pierre Jonin (trad.), *op.cit.*, p.135. Alexandre Micha (trad.), *op.cit.*, p.279. Laurence Harf-Lancner (trad.), *op.cit.*, p.267. (ヴァルンケ版の現代フランス語訳)。The *Lais of Marie de France*, Translated with an Introduction by Glyn S. Burgess & Keith Busby, coll.<Penguin Classics>, Penguin Books, 1986, p.110 (エヴァート版の英語訳)。マリー・ド・フランス、『レ』。森本英夫・本田忠雄訳、東洋文化社、1989年再版、p.165 (エヴァート版の邦訳)。/ (c) 大高版では動詞が«amereit»(<amer)ではなく«avereit»(<avoir)となっている。/ (d) リシュネル版とミーシャ版では«amer»は«requere»と等位におかれているが、エヴァート版、ヴァルンケ版、大高版では«d'amer»は«requere»の間接目的補語である。/ (e) エヴァート版、ヴァルンケ版（これのみ Eq v.147）、ミーシャ版では、リシュネル版同様、「amer»は«aime»と活用しており、その主語は「誰か(aukun)」であり、直接目的補語は明記されていないが、大高版では«amer»は«amez»と活用しており、その主語は省略された「あなた（＝エキタン）」、直接目的補語は「誰か(aukun)」である。Cf. Pierre Jonin (trad.), *op.cit.*, p.31. Laurence Harf-Lancner (trad.), *op.cit.*, p.79. Alexandre Micha (trad.), *op.cit.*, p.89. Glyn S. Burgess & Keith Busby (trans.), *op.cit.*, p.58. 森本英夫・本田忠雄訳、前掲書、p.39。/ (f) 各テキストの底本となった写本、大英博物館蔵 «Harley 978, fol.139^v-181^v» には欠けている箇所が数箇所あるが、D.1 v.24 もその中に含まれる。そのため、エヴァート版、大高版にはこの箇所が欠けている。リシュネルはこの箇所をフランス国立図書館蔵 «nouveau acq. fr. 1104» に基づいて加筆している。Cf. Jean Rychner (ed.), *op.cit.*, pp.xxi-xxii et pp.262-263, note des vv.23-30

(文学部非常勤講師)